

主 題：地上で最も愛すべき場所

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章14－16節

テーマ：あなたは教会を愛しているでしょうか？

「教会は完璧な人々のための施設ではありません。教会は恵みによって救われた罪人たちの避け所、神の愛しい子どもたちが養われ、たくましく育つ託児施設です。教会はキリストの羊の囲いであり、キリストの家族の家です。教会は地上で最も愛すべき場所なのです。」これはかつて19世紀のイギリスで活躍した牧師、チャールズ・スポルジョンが残したことばでした。教会は地上で最も愛すべき場所であると。間違いなくスポルジョン師は、教会の大切さをよくわかっていました。彼はすべての信仰者の歩みにとって、どれほど地域教会が重要なものであるかを正しく理解していました。それはまさにその通りでした。

少し考えてみてください。私たちにとって教会はどんな場所でしょうか？どんなことを私たちは教会で行うのでしょうか？たとえば、私たちはともに集って愛する主に賛美をし、霊とまことをもって礼拝をささげようとしています。年齢も性別も、時に国籍も異なる色々な違いを持った兄弟姉妹が一つとなって、同じ神様にほめ歌を歌い、この方に栄光を帰そうとするのです。また教会では、語られるみことばや福音を通して神様がどのような方なのかを知ることができるだけでなく、そのみことばに従うことによって、信仰者はともに霊的成熟を目指して歩んでいこうとします。確かに毎週のメッセージを通して、自分自身の罪深さが示され心が責められることがあります。しかしそれと同時に、私たちは、キリストにある救い、赦しの偉大さをますます覚え、その真理をお互いの間で分かち合い、励まし合って歩んでいくことができます。またそれだけでなく、教会では、同じ神の家族に属する兄弟姉妹が時間をとって一緒に交わりをし、互いの必要のために仕え合おうとします。犠牲を払って愛や赦しを実践したり、困難や苦しみを覚えるときには、祈り合ったり支え合ったりすることができるのです。もちろん、ほかにも色々なことを挙げるすることができます。でも、少なくとも今のものを考えただけでも、私たちはこのように言えません？「教会は私たちにとって特別ですばらしい場所だ、確かにスポルジョンは正しかった、教会はまさに地上で最も愛すべき場所だ」と。

でも、ここでちょっと立ち止まって自分自身に問いかけてみてください。はたして、実際には私たちはどのような思いを今、教会に対して持っているのでしょうか？教会は自分にとって心から大切に愛すべきもの、と本当にそう考えているのでしょうか？それとも何か義務的で、一週間に一度は行かなければいけないもの、と感じてはいないのでしょうか？同じ主に召された兄弟姉妹、神の家族と一緒にあって信仰生活を歩んでいくことができるというその事実は、大きな喜びをあなたの心にもたらすものでしょうか？それとも、自分にはあまり必要のないもの、クリスチャン生活はひとりでも十分にやっていける、と考えていないのでしょうか？あなたは教会を愛しているのでしょうか？教会、神の家族、それらはあなたにとってどのようなものなのでしょうか？

これまで約三ヶ月にわたって学んできた、霊的リーダーのあるべき姿、そのシリーズも残すところきょうと来週のあと二回になりました。最後に私たちがみことばから一緒に考えたいこと、それは、この「教会について」です。霊的リーダーである長老と執事の資格についてIテモテ3章の特に1－13節を通して教えてきたパウロは、最後14－16節で、まとめとして、教会について私たちに教えてくれているのです。ですから皆さん、今一度、「教会とは一体何なのか」をこの箇所から考えてみましょう。特にこの14－16節では、私たちが覚えているべき教会の五つの姿をパウロは描いてくれています。ですから、そのことを私たちは二週にわたってよく考えてみましょう。そして、そのことを見てい

く中で、どうして教会がそれぞれにとって重要なのか、なぜ私たちはその教会を何よりも愛すべきなのかを、改めて自分自身のこととしてよく考えてみてください。あなたは教会を愛しているでしょうか？その質問に対する答えを自分自身で考えてみてください。では早速、内容に入っていきますが、その前にいつものようにまずみことばをお読みしたいと思います。

I テモテ 3 : 14 - 16

「:14 私は近いうちにあなたのところに行きたいと思いつつも、この手紙を書いています。

:15 それは、たとえ私が遅くなればあいいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。

:16 確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。

「キリストは肉において現われ、

霊において義と宣言され、

御使いたちに見られ、

諸国民の間に宣べ伝えられ、

世界中で信じられ、

栄光のうちに上げられた。」

○教会とは何か：教会の五つの姿

1. 教会はみことばに根ざした行動が求められるもの 14 - 15a 節

さて、まず一つ目に教会の姿としてパウロによって描かれていたもの、それは、「教会はみことばに根ざした行動が求められるもの」だということです。もっと簡潔に言えば、「教会はみことばに根ざしたもの」だということです。このように14節から記されていました。もう一度見ていただくと14節から、「:14 私は近いうちにあなたのところに行きたいと思いつつも、この手紙を書いています。:15 それは、たとえ私が遅くなればあいいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。」パウロはここで、自分自身の状況と自分自身の願いを、まずテモテに対して説明していました。私は近いうちにあなたのところに行きたいと思いつつも、この手紙が記された歴史的背景を少し思い返してみてください。パウロはI テモテ 1 : 3 でこのように言っていました。「私がマケドニヤに出發するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっています…」と。パウロは弟子のテモテをエペソに残し、マケドニヤへと出發して行きました。残されたテモテには、この当時、エペソの教会に入り込んでいた偽教師がもたらした問題によって混乱していたエペソの兄弟姉妹を、みことばから教え、導いていくという、非常に大きな責任を負っていました。この時、彼はまだ若かったので、彼には助けが必要でした。だからこそ、パウロはテモテのもとに早く戻って来て彼を助けたいと願っていました。それは彼にとっての強い願いだったからこそ、同じ願いをI テモテ 4 : 13 にも書いています。「私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。」と。「テモテ、私が行くまでこのことをしなさい。」パウロは、できるだけ早くテモテのもとに行きたいと願っていました。それが彼にとって一番の願いでした。でもそれが遅くなってしまうたり、色々な理由でテモテのそばに居ることができない場合でも、テモテが神の家、教会でどのように行動すべきかを教えるためにこの手紙を書き送ったのです。

14節の最後に「この手紙を書いています」ということばがあります。「この手紙」というものがこれまでに語ってきた1—3章の内容を表しているのか、それともこのテモテへの手紙全体の内容を表しているのかにはさまざまな考え方があります。でも少なくとも言えるのは、この3章を通して私たちが見てきたように、パウロは、テモテが偽りのリーダーたちから教会を守って、どのような霊的リーダーを選ぶべきなのかをテモテに伝えようとしていたということです。テモテが神の家・教会にあって、どのようにふるまうべきなのかを伝えるために、自分がそこにはいない間にどのように彼がふるまうべきなのか

を教えるために、彼はこの手紙を記していたのです。実際にパウロがエペソの教会やテモテのもとを再び訪れることができたのかはよくわかっていません。多くの人たちは、おそらくこれは叶わなかったのだらうと考えています。

皆さん、ここで少し考えてみてください。パウロがいないとき、テモテやエペソの教会の人たちは、何を頼りに教会生活を歩もうとしていたのでしょうか？それは神の家でどのように行動すべきかを記して書き送られてきた“パウロの手紙”でした。テモテやエペソの兄弟姉妹は、自分たちが思うがまま好き勝手にふるまうのではなくて、パウロから伝えられたそのことばに基づいて行動するということが求められていました。つまり、教会にあって、みことばの基準に根ざしたふるまいが問われていたのです。そしてこれは今の私たちにとっても同じことです。今の教会にもパウロのような存在はいません。では、私たちは一体、何を頼りにして教会生活を過ごしていくのか、神の家である教会にあって私たちは一体、どのようにふるまうことが神様に喜ばれるのか…そのことをどのようにして私たちは知るのでしょう？私たちは神様のことばである聖書を通してそれを知るので。だからこそ、教会にとってみことばというものは欠かすことができないものです。みことばが語られることがなければ、私たちはどのように行動するべきなのかがわからないのです。教会はみことばの重要性をよくわかっていました。教会は誕生のそのときから、何よりもこのみことばを大事にしてきました。

思い返してみてください。使徒たちの上に聖霊が下って教会が誕生したことが記されている使徒2章、そこで福音を受け入れた者たちがともに集って一体何をしていたのか、そのことが使徒2章4:1-4:2に「:41 そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。:42 **そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。**」と記されていました。彼らは使徒たちの教えを固く守っていたのです。教会はその初めから使徒の教え、みことばを固く守り、それに従って歩もうとしていました。

ここで皆さん、少し考えてみましょう。私たちが「教会にとって、みことばが大切です」と言えば、「それは当たり前です」と言われると思います。では、逆に、もし私たちがみことばをいっさい捨てて信仰生活を歩み始めたなら、どうなると思います？聖書に記されていることは難しいから自分たちの思うようにしていこうと歩み始めたら、教会はどのようになってしまうのでしょうか？たとえば、私たちの礼拝はどうなります？みことばを除いた礼拝はどんなふうになると思います？確実に大きく変わります。みことばの真理に基づいた曲を賛美することよりも今どきの楽しい歌を歌おうよ、難しい話よりも聴いていて心地よくなるような話の方がみんな聴きたいだろうから、聖書からメッセージを語るよりもこの世でためになるような話をしよう…そのように教会が歩み始めたらどうなります？私たちの教会学校はどうなるのでしょうか？私たちの教会生活はどうなるのでしょうか？私たちの霊的リーダーたちはどうなるのでしょうか？みことばを取り除けば私たち自身の歩みはどうなってしまおうのでしょうか？みことばを取り除いてしまえば、私たちはそこに、頼りとする何の基準も見出すことができなくなるのです。私たちが一致するための土台もなくなってしまいます。間違いなく教会は混乱に陥り、もっと言えば、ともに集う意味を失ってしまうのです。皆さん、もし教会でみことばが語られなかったら、教会に来ます？だからこそ、私たちの歩みはいつもみことばに根ざしている必要がありました。みことばがなければ、そこに成長はありません。ペテロもそのことをこのように言っています。私たちがよく知っている I ペテロ 2:2 **「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」**なぜ私たちがみことばを慕い求めるのか、なぜ教会がみことばを語ることが重要なのか？それは、私たちはみことばによってのみ、成長することができるからです。霊的リーダーたちがみことばを語るのはどうしてか？それによってのみ私たちひとりひとりが整えられて、キリストのからだを建て上げる者として奉仕することができるからです。キリストに似た者へと変わりたいと望むのなら、みことばを通してキリストの姿を学ばなければいけません。罪に対し勝利することを望むのな

ら、自分の心を守るためにみことばを蓄えなければいけないのです。みことばが私たちの成長の鍵です。私たちがみことばを蓄えて、聖霊なる神様の助けにより頼みながら歩いていくなら、そこに成長を生み出すことができるのです。そして、みことばを通してのみ、私たちは教会にあってどのように行動するのか、神の前にどのような歩みをするのが喜ばれることなのかを知ることができます。みことばが鍵なのです。そうだとすれば、そのみことばを私たちはどれほど自分のうちに蓄えて、それに従って歩いていこうとしているでしょうか？みことばを何よりも重要なものとして扱っているのでしょうか？先にも見ましたが、もし私たちがみことばを捨ててしまえば、そこに信頼することができる基準も、一致するための土台もなくなってしまいます。しかし、私たちがみことばに立ち続けるなら、そこに私たちの歩みに十分な知恵や力を見出し、その上に私たちは一致を見出すことができるのです。“聖書こそが教会の揺るがぬ土台” そうなるものでした。それゆえに、教会はみことばに根ざした行動が求められていたのです。そしてこれが一つ目の教会の姿でした。

2. 教会は神の家族として仕え合うもの 15 b 節

二つ目に教会の姿として描かれていたもの、それは、「教会は神の家族として仕え合うもの」でした。みことばは15節にこのように続いていました。「それは、たとい私がおそくなったばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり…」ここで重要になるのが、この「神の家」と訳されていることばです。「神の家」とは一体何のことを意味しているのでしょうか？家というのは何かしらの建物のことを表しているのでしょうか？そうではありません。ここでパウロが「神の家」と言ったとき、それは「神の家族」のことを表していました。私たちがみことばを見ると、聖書は繰り返し、私たちが救われた時に神様が私たちを子どもとしてくださった、と語っていることを見てとることができます。たとえばエペソ1:5を見てみるとこうありました。「神はみむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。」言い換えれば、キリストによって救われた者たちはみな、同じ父を持つ兄弟姉妹へと変えられたということです。救われている者はみな、同じ父を持つ、一つの神の家族として歩んでいるということです。でも、ある人はこういうかもしれません。「私はあの兄弟とはちょっとうまくやることができません、あの人を愛することは難しいです。」と。しかし、そんなときに私たちが覚えなければいけないことは、救われた私たちはみな、同じキリストを愛する一つの家族として生かされているということです。家族として歩んでいるのです。だからこそ、「私は、神様は愛するけれど、兄弟を愛することはしたくありません」などと言えることができる人はひとりもいないのです。ヨハネもこのように言っていました。Iヨハネ4:20「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」キリストを愛する者たちというのは、同じように教会を愛する者でした。教会というのは、私たちが通う場所ではなく、私たちが属する家族なのです。そしてそのような教会は、神の家族として愛し合うことを実践しようとするのです。私たちは神の家族として今を生かされているのだとみことばを教えていました。

でも、ここでよく考えてみてください。私たちはよく、「教会は神の家族です」と言いますが、では、それには具体的にどんな意味があるのでしょうか？私たちが神の家族としてともに歩いていくというのは、一体どういうことを言うのでしょうか？もちろん、これには色んなことが言えます。言い出したらキリがなく、それだけ言っていればこれでメッセージが終わってしまうので、一つだけ言うとすれば、神の家族として歩いていくということは、私たちはみな教会にあってそれぞれに責任を負っている、ということです。ちょっとそれぞれ自分の家庭を思い浮かべてみてください。家庭というものを考えてみれば、父親は、母親とは異なる責任を負っていますね。母親も同じです。夫や妻もそれぞれに違った役割、責任があるし、子どもも子どもで彼らにとって必要な責任を負っています。同じ一つの家族に属する者たちであっても、みなそれぞれに果たすべき異なる責任を持っていて、それに忠実であるということが求められるのです。それぞれに働いて責任を果たさなければ、その家庭はどうなります？大変なことになるのです。そしてこれと同じように、教会にあって同じ家族に属するひとりひとりのクリスチャンも、それぞれに与えられた賜物を用いて仕え合っていくということが求められるのです。私たちそれぞれにも責任

があります。だからペテロもこのように言っていました。Ⅰペテロ4：10「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」と。こう始まっていましたね。「それぞれが賜物を受けているのですから…」私たちは確かに、同じ主にあって一つの神の家族に召されました。でも、ひとりひとりには、神様から特別な役割、責任が与えられています。だからこそ、私たちは神様から与えられた賜物を働かせ、兄弟姉妹の徳となること、何よりも神様の栄光を現わすことを追い求めていこうとするのです。私たちひとりひとりにはそれぞれが果たすべき責任が、神様から与えられています。しかし同時に、覚えていなければいけないことは、あなただけではなくて、ほかの兄弟姉妹も教会にあってそれぞれ特別な役割を担っているということです。言い換えれば、私たちの歩みには必ず、兄弟姉妹の働きが必要だということです。私たちひとりひとりが救われたように、周りにいる兄弟姉妹も同じように救われ、神様から賜物が与えられました。神様からそれぞれに大切な責任が与えられました。そしてその人は、自分とは異なるかたちで教会の成長に貢献することができるのです。みなそれぞれに責任が与えられ、みなそれぞれが働いていくことを求められているのです。だからこそ、私たちが神の家族として歩んでいくことを覚えるなら、だれひとりとして、「あの人は自分には必要ありません」などと言える人はいないということです。パウロは教会をキリストのからだにたとえて、このようにわかりやすく教えてくれていました。Ⅰコリント12：20-21と27節を見ると「:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」言うこともできません。」「:27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」みことばははっきりと教えてくれていました。私たちが互いにそれぞれが器官なのだ。器官がほかの器官に向かって、「あなたは私には必要ないです」などと言うことはできませんと。

そうだとすればどうですか？はたして、私たちはそのように考えて歩んでいるでしょうか？互いに仕え合っていくということを楽しんでいるでしょうか？兄弟姉妹のために犠牲を払って仕えていくことは私にとってほんとにすばらしい、幸いだ、とそのように歩んでいるでしょうか？もしかしたら、こんなふう考えたことがある方がいるかもしれません。…私にはだれの助けも必要ではない、人に邪魔されて自分のやりたいことができなくなれば気分が悪くなるし、自分ひとりでやったほうがうまくできる、兄弟姉妹がいなかったとしても自分の歩みには問題はない…こうして自分ひとりだけで歩んでいくことを望むことがあるかもしれません。そんな思い持つこともあるかもしれません。

正直になれば、時に家族というものが厄介な難しさを感じるということを、私たちはよくわかっています。夫婦関係や親子関係、どれだけその関係が深くてもそこに何の問題が起こらないとは言い切れないのです。皆さんの家庭の中で、最後に問題が起こったのはいつですか？大きな問題だけではなくていいです。ささいな言い争いかもしれません。いつ問題が起こりました？そしてその原因となったものは何でした？それらのものを振り返ってみれば、こう思いませんか？周りにいるほかの人たちと比べて、家族の間ではほんのささいなことがきっかけで、互いに不満を感じて言い争ったり、イライラして怒りを感じるということがあると。ほんのささいなことです。たとえば、自分の置いていた物を置いていた場所から勝手に移動させられていたり、部屋が使ったまま散らかっていたりしたら？食事が時間通り用意されていなかったら？どんなもので皆さんが問題を生じるのかは分かりませんが、でもほかの人であれば容易に見過ごしたり、赦したりすることができるものが、家族だったら時にできないことがあります。どうして私たちは、そのようなささいなことで色んな問題を起こしてしまうのでしょうか？これにも当然色々な理由を挙げることはできますが、一つ挙げるとすれば、それは、私たちが家族に対してほかの人以上に期待するからですね。こうあって欲しいと私たちは願うのです。そういった願いは、それ自体はすばらしいことだと思えます。でもその期待が時に絶対にこうあるべき、こうでなくてはならない、と自分本位なものに変わってしまえばどうなるか？それに反するものを目の当たりにしたときに、問題となって生じるのです。

教会もこれと同じです。救われた者たちは同じ神様を愛する神の家族として今を生かされています。しかしそんな救われた者たちも、変わらず罪の性質を持っているので、色んな点で失敗や過ちを起こすことがあります。兄弟姉妹に対して罪を犯し、互いを傷つけてしまうことがあるのです。そうなるかどうかと言えば、…あの人がやったことはありえない、クリスチャンとして考えられない、こんな酷いこ

とをするような人とは一緒にやっていくことはできない…と考えたりします。自分の求めている基準を満たしていない、自分の期待に沿っていないといった間違った期待によって、一致ではなく、分裂というものが生み出されてしまうのです。自分の求める基準を満たしていない、こうあるべきだと。そのような間違った期待が、さまざまな問題を教会の中にも引き起こすことがあるのです。みことばが教えていない自分本位な期待を押し付けて、神の家族として生きていくことを拒んではいけないでしょうか？はたして私たちはどのように教会のことを考えているのでしょうか？

ある人は教会を神の家族ではなくて、まるでコンビニのように考えていたりします。私たちがコンビニに行けば色々な商品が並んでいるのを目にします。そしてその中から、自分の欲しい物、自分を満足させる物だけを選んで購入します。これと同じように、ある人たちは教会に対して、自分の欲しいものだけを選ばせて欲しい、ほかの人たちはいらぬ、自分の必要を満たすものだけを私は手にしたい、との思いを持っているのです。また、ある人たちは教会を神の家族ではなくて、まるで映画館やスポーツ観戦のように考えていたりします。これもどういうことかと言えば、私たちが映画を観たりスポーツ観戦をする目的は何ですか？ 私たちは自分の目の前で繰り広げられているのを楽しみます。自分自身は何もしません。そこに登場してくる俳優や選手たちが行うことを目にしてそれを楽しみ、時にそれを批評するのです。これと同じように、ある人たちは教会にやって来て何かをするわけではなくて、ただほかの兄弟姉妹やある一部のリーダーたちが行うことやその歩みを見て、間違ったことや自分の基準に反していることをしていれば、それを見て批評するのです。自分が仕えるのではなくて自分を満足させることを求め、それが叶わなければ悲しんだり憤りを覚えます。こうして私たちは、特に教会に対して色んな誤った考えや間違った期待を持ち、それに反することが起これば、憤りを覚えたり文句を口にすることがあるのです。

でも、もしこのような考え方が私たちのうちがあるなら、それは大きな間違いです。このような考え方はみことばが教えている教会の姿を正しく理解していません。教会は神の家族として生きています。この家族に属する私たちひとりひとりには、それぞれに神様から与えられた責任があります。その責任を果たして、互いに仕え合っていくことが求められるのです。教会にはひとりとして傍観者はいません。私たちにそれぞれ神様から与えられた責任があるのです。もちろん、そのように神の家族として生きていくときには、当然難しさや忍耐というものも問われます。でもそれは、皆さんがそれぞれの家庭にあって経験することと同じですね。それぞれが家庭にあってともに暮らしていこうとするなら、そこに難しさがあります。そこに忍耐も問われます。同じことが神の家族にも問われるのです。

だからこそ皆さん、もし私たちが難しさに直面するなら、このことをよく覚えることです。神の家族に属するすべての者は、キリストが十字架にかかってその血潮をもって犠牲を払い、買い取られた兄弟姉妹だということです。私たちが神の家族として歩んでいくときに、私たちの周りの兄弟姉妹というのは、私たちが恵みにより、キリストにより、信仰によって救ってくださったそのイエス・キリストの救いをいただき、同じように救われた者たちが恵みによって歩んでいるのです。その人たちもキリストによって買い取られた者です。そのことを覚えることです。

私たちはみな、かつてキリストから離れていました。この世にあって望みなどない者として歩んでいたのです。罪と罪過の中に死に、自分の肉と欲の望むままを行い、私たちに値したものは、ただ神様の御怒りだけでした。私たちはみな、その罪深さゆえに例外なく永遠のさばきを受け地獄で滅ぶべき存在だったのです。しかしそんな愚かでどうしようもなかった私たちを、神様は恵みにより、キリストによって救い出してくださいました。そしてそれだけでなく、この方を信じ受け入れる者を、神様は子として迎え入れてくださったのです。これが、神様が私たちに示してくださいましたあわれみ、愛でした。私たちは罪を赦され、神の家族とされた者として歩むことをよしとされたのです。そのような愛を神様が私たちに示されたのだとするなら、私たちにはどのような応答がふさわしいでしょうか？そのようなすばらしい救いを与えてくださったのであるなら、私も感謝をもってみずからすすんで、同じ神様を愛する家族とともにキリストが示してくださいましたその同じ愛を實踐していきたい、との応答でしょうか？だれひとりとして自分だけで信仰生活を生きていくではありません。神様は、同じ主を愛する兄弟姉妹を、私たちの生活に私たち歩みのうちに与えてくださいました。それぞれが足りないところを補うことによって、それぞれがそれぞれに与えられた責任を果たすことによって、私たちはキリストのからだをともに建て上

げていくのです。神の家族として仕え合っていくということ、それが教会に求められていたことでした。これが二つ目の教会の姿でした。

3. 教会は生ける神が所有するもの 15c 節

最後に三つ目の教会の姿として描かれていたもの、それは、「教会は生ける神が所有するもの」でした。先ほども少し読みましたが15節にこのように書いていました。「神の家とは生ける神の教会のことであり、」ここで注目して欲しいのはこの「教会」と訳されていることばです。「教会」ということばを聞けば、多くの人たちは真っ先に、十字架のついている建物や、クリスチャンが集まって礼拝をおこなう場所を思い浮かべるかもしれません。しかしここでの「教会」とは、そのようなものを指してはいません。ここで教会に対して「エクレシア」というギリシャ語が用いられていますが、このことばには建物ではなく、「一般的な人々の集まり」や「群衆」といった意味があります。またそれに加えて、このことばの語源には「呼び出す」とか「召し出す」といった意味もあります。つまりこれら二つのことを踏まえて考えると、「エクレシア」というのは建物のことを指しているのではなく、「召し出された人々の集まり」、もっと言えば、「神様によってこの世から救い出された者たちの集まり」、それこそが「教会」だということです。そしてそんな教会が、「生ける神の教会であり、神様が所有するものなのだ」とパウロは訴えていました。

ここで、パウロは「生ける神」ということばを用いていました。このことばを私たちがより正しくよく理解するために、パウロが手紙を書き送った当時のエペソの町がどのようなものだったのかを、少し思い返してみましょう。かつてこのエペソという町は、商業の中心として栄えていただけでなく、宗教の中心地としても有名でした。エペソには古代世界の七不思議として挙げられるアルテミス神殿があり、当時の人々にとって、この大女神アルテミスこそが信仰の対象でした。多くの人たちが自分自身をこの偶像に対してささげていたのです。アルテミスに対するその信仰がいかにこの当時の世界に大きな影響力をもたらしていたのかは、神殿の建設に関わったデメテリオという人物のことばからも私たちは見取することができます。使徒19:25-28にこのように記されていました。「19:25 皆さん。ご承知のように、私たちが繁盛しているのは、この仕事のおかげです。26ところが、皆さんが見てもいるし聞いてもいるように、あのパウロが、手で作った物など神ではないと言って、エペソばかりか、ほとんどアジア全体にわたって、大ぜいの人々を説き伏せ、迷わしているのです。27これでは、私たちのこの仕事も信用を失う危険があるばかりか、大女神アルテミスの神殿も顧みられなくなり、全アジア、全世界の拝むこの大女神のご威光も地に落ちてしまいそうです。28そう聞いて、彼らは大いに怒り、「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ。」と叫び始めた。」想像できますね。エペソの町に住んでいたクリスチャンたちというのは、そのような偶像を拝む人々に囲まれた生活を送っていたのです。彼らの周りには、このアルテミスこそが真の偉大な神なのだという誤った考えがはびこっていました。だからこそパウロは言うのです。「人の手によって作られたアルテミスなど神でもなんでもありません。生ける神こそ、私たちがほめたたえるべきお方。そして、生ける神は、死んでいて何の意味も持たない偶像にあふれた神殿にではなく、教会の中に見て取ることができる。」と。

教会は、生ける神様のものです。教会は、生ける神様の所有物です。だからこそ、その教会を見れば、神様が確かに生きていて人々のうちに働かれるお方であることを私たちは覚えることができます。たとえば、かつて罪の奴隷として歩み、神様の前に忌みきらわれる罪を犯し続けてきた者たちが、福音に出会い、変えられるのです。かつてこのようなはかない楽しみに満足を見出していた者たちが、キリストの救いを知ったことによって変えられていくのです。かつて罪の奴隷として歩んでいた者たちが、義の奴隷として、神の子どもとして聖さを追い求める歩みをしていきたいと望む者へと変えられていくのです。そのような働きを目の当たりにするときに、この神様が力のない死んだお方でなくて、あー確かに生きて働かれるお方なのだ、と見て取ることができます。この世界を創造し支配されているそんな主権者なる神様が、今もなお人々のうちに働かれる偉大なお方であることを私たちは見ることができるのです。この方は生きておられる！

皆さん、私たちが、神様が今も生きて働かれるお方だと知っているのだとすれば、はたしてこの方の目を覚えて日々の生活を歩んでいるでしょうか？この方が聖くあられるように、自分自身の聖さを追い求めているでしょうか？また自分自身のことだけではありません。私たちが神の家族として生きている以上、神の家族として生きる兄弟姉妹が同じように罪を離れて聖さにおいて成長していく助けを、私たちは喜んで与えたいと機会を求めているでしょうか？ヘブルの著者はこのような警告をクリスチャンたち

に対して与えていました。ヘブル3：12-13に「12 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。13 「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」とはっきりと書かれていました。「あなたがたの中で罪によって悪い不信仰の心になり生ける神から離れる者が出ないように気をつけなさい。」言い換えれば、罪によって心がかたくなになり、神様から離れ信仰を捨ててしまうことがないように、という警告がなされていたのです。もちろんこれはヘブルの著者が、救われている者たちが救いを失う可能性がある、という話をしようとしていたのではありません。イエス様はこのようにも言われていました。ヨハネ10：27-29「27 わたしの羊はわたしの声を聞き分けず。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」救いは、自分たちの努力や力で与えられるものではないです。救いを与えてくださるのは、神様です。救われた者たちをいつも守ってくださるのも、神様です。神様が私たちを守ってくださるからこそ、だれもその手から私たちを奪い去ることができないのだ、神様によって守られているのだと、そのような希望を持つことができます。

では、ここで、生ける神から離れてしまう者とは、どんな人物のことを言っているのでしょうか？それは初めから本当の救いを持っていなかった者のことです。この人物は初めからキリストを知らなかったからこそ、時が来れば罪によって心がかたくなになり、ついには信仰を捨ててしまうのです。初めは口で信仰告白をし、教会に通ってさまざまな働きを行っていたかもしれせん。しかし次第に、その歩みが自分の告白とかけ離れたものになっていくのです。みことばの教えることよりも罪を愛するようになり、神様に従うことよりもこの世のはかない楽しみに心が奪われるようになっていくのです。最初から救いに根ざしていなければ、こうして時が経つにつれて生ける神から離れていくのだと。これは非常に恐ろしい警告でした。

でもここで注目して欲しいことは、そんな恐ろしい警告に対して、ヘブルの著者は何をしようかと求めているかということです。こう言っていましたね。「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」何て言われていました？求められていたのは、兄弟姉妹が互いの間で罪に惑わされないようにと励まし合うことでした。なぜ励まし合うのですか？それは自分ひとりだと、絶え間ない罪の誘惑や罪との戦いによって心が惑わされ、覚えるべき真理を忘れてしまうことがあるからです。みことばは明白です。私たちにはいつも真理を語ってくれる、そのような兄弟姉妹が必要なのだと。私たちが罪によって心がかたくなにならないように、互いに励まし合いなさい、神様がどれほど偉大なお方なのか、キリストがどれほどすばらしいお方なのか、キリストにある満足がいかにほかのすべてのものに勝って尊いものなのか、そのような希望や約束といったものを覚え続けることができるように、互いの間で励まし合うことだと。それが欠かせないのだと教えていました。

でも同時に、この「励ます」ということには「戒める」とか「諭す」という意味もあります。つまり、兄弟姉妹は、希望や約束を思い出させることによって励まし合うだけではなくて、戒め合うことも求められているということです。あなたが行っていることは間違っていますよ、それは神様の前に大きな罪です、だから悔い改めてキリストに立ち返りなさい。…そのように愛を持って戒めてあげることも、それぞれの歩みにとって欠かせない大切なものだという事です。なぜそれをするのか？書いていましたね。私たちが罪によって心がかたくなになって、生ける神から離れないように、私たちは互いにそのことを実践するのです。ともに集って罪に騙されて心がかたくなにならないように、生ける神から離れることがないように、福音を語り合い、キリストをいつも覚え続けられるようにと助け合うのです。それをするのが教会、神の家族の歩みなのです。私たちの神様は生きた神様です。この方は罪に対して怒りを燃やす、聖く正しいお方です。しかし同時に、この方はあわれみ深く愛に富み、私たちに必要な助けを与えてくださる、そのような神様です。この方が生きておられるお方だからこそ、私たちはこのような神様に信頼した日々を歩んでいくことができます。たとえ私たちに理解できないことが起こったとしても、生きておられる神様がすべてのことを支配しておられるのだと、すべてをゆだねることができます。そして私たちは、この生きた神様の所有物なのだ、教会なのだと感じることができます。生きた神様がともにい

て歩んでくださる、それは感謝なことですね。そうだとすれば、この神様の存在を覚え続けることです。この神様は生きていて、いつも私たちの歩みをご覧になっておられます。どんな時も、この神様に信頼し、兄弟姉妹が互いに励まし合い、戒め合うことを通して、みことばに従って生き続けることです。「教会は生ける神が所有するもの」これが三つ目にパウロが教えてくれていた教会の姿でした。

〇まとめ

さてこの朝、私たちは、教会とは何なのか、「覚えておくべき五つの教会の姿」の五つのうちの三つのことについて、パウロのことばから今一度考えてきました。どうだったでしょう？

教会はまず何よりも「みことばに根ざした行動が求められるもの」でした。聖書こそが教会の土台でした。聖書こそが、その行動すべてにおける土台となるものでした。また「教会は神の家族として仕え合うもの」でした。キリストが十字架にかかってくださり、その血潮をもって犠牲を払って買い取られた兄弟姉妹。同じ神を愛する者たちが家族として互いに仕え合うことを通して霊的成長を目指していくのです。ひとりではないのです。神の家族がともにみことばを実践し歩むことができるのだと。また「教会は生ける神の所有するもの」でもありました。私たちが罪に惑わされ、生ける神から離れてしまうことがないように、神の家族として生きる兄弟姉妹は互いに励まし合い、戒め合い歩んでいくことができるのです。

こうした教会、神の家族というものはさまざまな戦いがある中で、ともに生きていこうとします。そこには確かに難しさやチャレンジがあります。忍耐を問われることはたくさんあります。兄弟姉妹によって傷つけられることもあるでしょう。でも、だからこそ覚えることです。教会は完璧な人のための施設ではなく、恵みによって救われた罪人たちの避けどころです。私たちは同じキリストによって贖われた者として、この方に従っていく者たちの集まりなのです。それが教会です。

残りの二つは来週見ていきます。自分自身によく問いかけてみてください。あなたにとって教会は、地上で最も愛すべき場所、でしょうか？考えてみてください。そしてそのことを考えながら、今週も互いに励まし合って、キリストに心から喜んで従う、そのような歩みをともに実践していきましょう。